＜翻　訳＞

ヨハネス・パウリ：冗談とまじめ（14）

Frühneuhochdeutsch 研究会訳
（代表　森　　昌弘）

ここに翻訳したのは1522年刊行のJohannes Pauli: Schimpf und Ernst第647話―第693話である（第646話までは『中京大学教養論叢』第30巻第4号，第31巻第3号，第32巻第2号，4号，第33巻2号，4号，第34巻2号，4号，第35巻2号，4号，第36巻2号，4号，第37巻第2号に所載)。使用テキストは1924年刊のJohannes Bolte編（リプリント版1972年）を用い，適宜H. Österleyの版，その他を参照した。聖書に関しては『聖書新共同訳』(日本聖書協会1987年刊）に拠った。パウリの聖書の引用はほとんどすべてラテン語で，時とすると現今の聖書に一致しない場合，あるいは多少記憶違いと思われる箇所もある。それ故彼自身のドイツ語訳と重複する場合も，異同を明らかにするために，煩雑にはなるがすべてラテン語を添えて訳してある。聖書以外のラテン語も同じように扱った。

この翻訳は，Frühneuhochdeutsch研究会のメンバーが分担して訳したものを，最後に共同で検討修正したものである（訳の分担表は下記)。1996年7月現在のメンバー氏名はつぎの通りである。青木一行（名城大)，大沢峯雄（名大名誉教授)，木野茂（藤田保健衛生大)，工藤康弘（三重大)，精園修三（中京大)，中条宗助（名大名誉教授)，橋本忠欣（福井大)，松尾誠之（岐阜大)，森昌弘（中京大)，山田やす子（皇学館大）（以上アイウエオ順)。

分担表

第647話―第650話　青木	第651話―第655話　大沢
第656話―第661話　木野	第662話―第666話　工藤

第667話	精園	第668話—第672話	橋本
第673話—第679話	森	第680話—第682話	山田
第683話—第686話	青木	第687話—第689話	大沢
第690話—第693話	木野		

第八十九章　感謝について　特別なる章

第六百四十七話　冗談
妬み屋と欲ふか男がご褒美を欲しがったこと

長年にわたってご主人によく仕えた，三人の者がいました。第一の召使は自惚れ屋でした。二番目の男は欲ふか，三番目の男は妬み屋でありました。ご主人は彼ら三名の者たちを呼び寄せて言いました。「私はそのほうたちの奉公を愛でて，以下の条件で恩賞を与えよう。最初に望みを述べる者がいれば，その者の望みを叶えて遣わすぞ。もし百グルデンが欲しいというなら百グルデンを与えよう。そして次の者は二百グルデン，三番目の者には，さらにその二倍の四百グルデンじゃ。」まず第一は私ですなどと，希望を述べる者はいませんでした。

自惚れ男は言いました。「もし私にまずは一番目に望みを申せと仰るのでしたら，お情けのうございます。私は一番最後にご褒美を頂戴すべきで，それでこそ我が身の誉れもいや増すと申すものでございます。」欲ふかが申しました。「私はご褒美が沢山頂けますよう，二番目か三番目にして下さいまし。私には欲がございます。」かくして妬み屋が最初にお願いをしなければならなくなりました。そこで男は言いました。「私の片目をえぐり取って下さいませ。」この言葉は叶えられました。欲の深い男からは両眼がえぐり取られました。そして自惚れ男からは両眼がえぐり取られ，さらに両耳が切り落とされてしまいました。

他人が全くの盲いになるのならば，自分は片目ぐらい無くしても良いというような妬み屋は，ほかにも大勢いるのであります。

第六百四十八話　まじめ
蛇が王様の目も見えるようにしたこと

王様は宮殿のとある窓辺に鈴を掛けさせ，一人の裁判官を配しました。この裁判官は人々の正義を擁護すべく，誰ぞ鈴を鳴らす者がありはせぬかと，その場で待機しなければなりませんでした。他人に対して心中含むところのある者は，ここに来て鈴を鳴らすのであります。そうすると，当直の裁判官が姿を見せ，裁きを下したのでありました。ある時，鈴を鳴らす者がおりました。裁判官は下に降りて来ましたが，人っ子一人見えませんでした。そこで裁判官が上がって行くと，またしても鈴が鳴るのであります。裁判官はまた降りて来ました。この時裁判官は，一匹のひき蛙が蛇の巣穴を奪い取り，互いにシュッ・シュッと音を出しているのに気付きました。裁判官はこの事を王様に言上しました。王様は申しました。「行ってそのひき蛙を打ち殺し，蛇を救いなさい。蛇に手出しをしてはならぬ。」裁判官は命令を守り，蛇にその巣を返してやりました。

ほどなくして，この王様は目が見えなくなりました。ある時のこと，王様が床に伏せってお休みになり，女官たちや腰元たち，貴族たちやその裁判官が王様の回りに控えていると，あの蛇が窓から入ってきたのでした。蛇は口に一つの小石をくわえていました。並みいる人々が王様にそのことを申し上げると，王様は言いました。「その蛇に手を出してはならぬ。蛇も皆の者に危害を加える事はあるまい。」蛇は王様の寝台によじ登り，王様の両眼にあの小石で軽く触れました。すると，王様の眼はもとのように見えるようになったのでありました。蛇はその小石を残して帰って行きました。王様はこの小石を素晴らしい宝と思い，多くの人々の眼をその石で見えるように致しました。

このように，人々がみな感謝の心に気付いて呉れれば良いのにと思います。

第六百四十九話　まじめ
獅子と象が感謝を知る獣であるということ

象とか申す動物は，とても良く人に馴れるものであります。猟師たちが

象のいる場所に穴を掘っておきますと，象たちはその穴の中に落ち込んで，もう逃げ出すことができません。そこへ猟師が来て，棒でしたたかに象を打ち据えるのであります。やがて別の猟師がやって来て，さきの猟師を殴りつけ，象に餌を与え，穴から助け出してやると，象はまるでご主人の後を追う犬のように，その猟師の言いつけに従うようになります。それが猟師の優しさに対する象の感謝の気持ちなのであります。

先人の書に，聖マカーリウスが雌獅子の子供たちにその視力を回復してやったと載っておりますが，その後，この雌獅子はおのれの捕らえた獣の皮をすべてお礼の印にと，聖人の許に運んできたとのこと。獅子やそのほかの獣たちの報恩，または忘恩に関しては枚挙に暇が無いのであります。

第六百五十話　冗談
神父から馬をかたりとった男のこと[1]

ある村に一人の神父がいました。神父は一匹の可愛い子馬を持っていました。それは素晴らしい駿馬でありました。ここに一人の伯爵がいて，この馬が欲しくてたまらず，その馬を自分に譲ってくれないだろうか，値段を弾むからと懇望したのですが，神父はうんと言いませんでした。この馬は私の喜びなのですと神父は言うのでした。あの神父は俺に馬を譲ろうとしないと，ある時のこと伯爵が話したことがありました。その場にオイレンシュピーゲルという名の山師が居合わせていて，こう言いました。「旦那さん，私に何を呉れますかね。お金を払わずにあの神父さんから馬をせしめて参りますがね。」伯爵は言いました。「私が着ているこの長衣に別の馬を一頭添えて遣わそう。」山師はこの申し出に納得しました。

オイレンシュピーゲルはその神父の知り合いであったところから，神父の許に数日滞在し，骨休めをしました。数日後，オイレンシュピーゲルはまるで病気にでもかかった様に，寝台に伏せったまま急がわしげな息遣いをしていました。神父はそんなオイレンシュピーゲルに告解をするように勧めて申しました。「あなたはこれまで，始末に負えぬお方じゃった。もしあなたが告解もせずに死んでしまうことになったら，私の恥となりましょ

1　「ティル・オイレンシュピーゲル」第38話参照。

う。」オイレンシュピーゲルは言いました。「私はあなたに告白したいと思います。」そしておもむろに神父に向かって告解し始めました。長々と悪戯のかずかずを告白したあとで，最後に言いました。「神父様，一つ思い出しました。はじめから思い出していたら，あなたに告白をしてはいなかったでしょう。他の神父様に来て戴けるように仰ってくれませんか。」神父は言いました。「よそのどの村に行っても，神父は留守かもしれぬし，あなたの寿命がその間にも尽きてしまうやも知れません。たとえ私に係わりがあるとしても，一応は話してご覧なさい。」病人は言いました。「はい，あなたに係わりがあるのです。」神父は言いました。「話してしまいなさい，あなたの息はとても荒くなっていますよ。」オイレンシュピーゲルは言いました。「宜しうございます。それではあなたにお話しいたしましょう。私は神父さんのところの女中と訳ありという，つまり一緒に寝たことがあるという事でして，」神父は聞きました。「何度くらいですか。」オイレンシュピーゲルは言いました。「多分十回くらいかと思いますが。」神父は腹を立てました。それで赦しをあたえると，すぐさま台所に走っていって女中に言いました。「この罰当たりめが，なんたることだ。信心深い女とばかり思っていたのに，病気のあいつとも寝ていたんだな。」女はしきりに打ち消しました。が，神父は言いました。「本当だったんだ。言い逃れはできないぞ。あの男がたった今私に告解したばかりなんだぞ。」そしてお互いに喧嘩口論となりました。男はその一部始終を聞いてからに，大笑いをし，そして思いました。「これは旨く行きそうだわい。」

三日あまり経って追々にオイレンシュピーゲルの体は本復し，立ち上がって，そして言いました。「神父様，私は旅に出ようと思います。体は良くなりました。お宅でどれほどのお金を使わせてしまったのでしょうか。」神父は言いました。「あなたのお世話は，私にとっては大した事ではありません。三グルデン払って下されば。」オイレンシュピーゲルは言いました。「喜んで。」そして神父に三グルデン渡して言いました。「これからザルツブルクに行こうと思います。そして秘密にして置かねばならぬ私の告解を，あなたが漏らしてしまったことを司教に談じ込もうと思っているのです。」神父はびっくりしました。自分がどんな立場に置かれているか充分悟ったのでした。「ねえ，そんな事は止めて下さい。そのお金はそのまま納めても

らって，それに加えて，倍のお金を贈りますから。それだけは勘弁してください。」オイレンシュピーゲルは納得しませんでした。神父は女中に頼んで，もしあの男が二十グルデン欲しいと言うならそれだけ与えても良いと，伝えて欲しいと，申しました。二十グルデンの助けも役に立たず，男はどんなお宝でも引き替えにするつもりは無いとのこと，ただし，神父が自分に馬を下さるならば，一件を落着させても良いとのことでした。人の良い神父は考えました。「僧禄を失うよりも馬を手放すほうがましだ」と。そしてオイレンシュピーゲルに馬を与えました。き奴めは馬に乗って，そこから出発したのでありました。

伯爵は人々と共に，城の前で腰を下ろし，馬に乗ってこちらに急いで来る者を見ていました。「あの山師が馬を連れてやって来るぞ。」オイレンシュピーゲルは伯爵の前に来ると，馬から下り，深々と頭を垂れ，馬を手渡し，そして事の次第を一同の方々に話しました。それを聞いて伯爵は大笑いをし，オイレンシュピーゲルに金張りのボタンを付けた上等の長衣と，別の馬を一頭与えました。このようにしてあの善良な神父は馬を失ったのでありました。

第六百五十一話　冗談
母にパンを届ける男のこと[1]

一人の浮浪人がおりました。ある村に貧しい母をかかえていました。母は息子に言いました。「お前はいつも満腹だというのに，この私はとてもひもじい思いをしている。小麦は高いよ。ぜひ一度たっぷりパンを食べてみたいね。」息子は言いました。「一週間たったら，たっぷりパンを持って来てやるよ。」そして，町へ行き，ある司教座聖堂参事会員の家にはいり込んで，まるでその人の下男のように，出入りしていました。ある時，男は主人の行きつけのパン屋へ行き，袋を持って来て言いました。「うちのご主人が大ぜいの客を招いた。それで，おれにこの袋一杯のパンを渡すように言っている。小僧を一人つけてよこしたら，現金を持たせるそうだ。」「よろしい」と，パン屋は言いました。男はパンを担ぎ，小僧を連れて出て行

1 「ティル・オイレンシュピーゲル」第6話参照。

きました。男は糞尿だめの所へ来ると，白パンを二つ落として，パンは糞尿まみれになりました。袋はそうなるように作られていたのです。男はパンを板に乗せて，言いました。「このパンをご主人に持って行くわけにはいかん。すぐ店へ帰って，これを取り代えてきてくれ。ここで待ってるから。」小僧は，言われる通りにしました。小僧が行ってしまうと，男は，そこに置いてあった荷車にパンの入った袋を放り上げました。こうして，パンは母のものになり，母はしばらくそれで食いつなぐことができました。

第六百五十二話　冗談

司祭が糞をしたのは，教会の真ん中ではなかったこと[1]

ある村に教会世話係がおりました。からかい好きの男でした。ある時，司祭がミサのために着替えをして，祭服をまとい，世話係が裾をからげようとしたとき，司祭は下からぷっと一発やったので，あたりに響き渡りました。世話係は言いました。「司祭様，これはミサのお香ですかい。」司祭は言いました。「それがお前になんの係わりがあるんだ。この教会はわしのものじゃないのか。教会の真ん中に糞をすることだってできるんだぞ。」世話係は言いました。「それにビール一樽賭けましょう。」司祭は「よし，賭けよう」と言って，教会の中へ糞をして，大きな百姓の菫[2]を盛り上げました。そして，言いました。「それ見ろ，ビールはわしのものだ。」世話係は言いました。「どっこい，司祭様，そうはいきませんぜ。まず，測ってみましょう。」そして，旗から竿を抜いてきて，測りました。すると，大きく外れていて，教会の真ん中ではないのです。司祭はビール一樽のお金を払わねばなりませんでした。

1　「ティル・オイレンシュピーゲル」第12話参照。

2　中世の恋愛歌人 Neidhart von Reuental（zw. 1180 u. 1190－zw. 1237 u. 1246）にまつわる話に由来する。Neidhart が春の野原で見つけた菫の花を大公妃に見せようと帽子をかぶせて，大公妃を迎えに行った間に，Neidhart といつも争っている百姓たちが来て，菫の花をむしり取り，そこへ野糞をして帽子をかぶせておいたという話はこの時代まで語り伝えられた。敢えて原語の通り訳した。

第六百五十三話　冗談
司祭のベッドに糞をする[1]男のこと[2]

一人の司祭が旅に出かけました。すてきな男でした。途中で，一人のからかい好きの男に出会いました。まことに粗末な服装をしていました。二人は一緒に宿屋に入りました。食事になると，司祭は亭主の食卓に座らされ，相棒はしもての別の食卓に貧しい仲間と一緒に座りました。おかみは司祭のご機嫌を取り[1]，料理を出して，食べるように勧めました。相棒は向こうに座っていて，この男には，食べるかとか，飲むかとか，など，何か言う者は誰もいませんでした。床に就くことになって，二人は一緒に来たので，同じ部屋の二つのベッドに寝かされました。翌朝，司祭は早く起きて，出かけました。相棒の浮浪人は起きて，司祭のベッドに大きな百姓の堇を盛り上げ[3]大きな水溜りを作り，ベッドを覆って，また自分のベッドに横になりました。

夏の一夜が明けると，おかみは給仕女に言いました。「お客様たちは起きたかい。」給仕女は言いました。「司祭様はとうにお発ちになりました。朝のお祈りはここですませました。でも，汚い服を着たお連れさんはまだ見かけておりません。」おかみは「あの人したたか飲んでたね。どこか悪いんじゃないか，見に行かなきゃ。」と言って，その部屋へ入り，雨戸を押し開け，掛布団をめくると，きゃっと叫んで十字を切り始めて言いました。「これは大変だ，何というひどいことを。」相棒の男は頭を上げて言いました。「どうしたんだい。どこか悪いのかね。」おかみは言いました。「ベッドの中へうんこをする[1]なんて，あの坊さんとしたことが。」男は言いました。「ベッドに糞をした[1]くらい，何の不思議もないよ。家中糞で一杯にしなかったのが，不思議なくらいだ。何しろ，ゆうべはご馳走出したり，ご機嫌取ったり[1]して，きりがなかったからね。」

1　原語はすべて hofieren.　hofieren には「機嫌を取る」と「糞をする」の両義があって，それをからませたもの。

2　「ティル・オイレンシュピーゲル」第85話参照。

3　前話652話の注2参照。

第六百五十四話　まじめ
ベッドで終課のお祈りをする男たちのこと

二人の修道士がおりました。一緒に旅に出かけました。夜になって床に就こうとすると，同じベッドに一緒に寝かされました。二人は，終課のお祈りをまだしていないことに気がつきました。終課のお祈りは忘れていたが，ぶどう酒は忘れていなかったのです。二人はベッドで身を起こして，一緒に終課のお祈りをしました。すると，悪魔が来て，ぷっと大きな一発をやったので，梁ががたがた音を立てました。物凄い悪臭でした。悪魔は言いました。「そういうお祈りには，こういうお香が向いてるよ。」

第六百五十五話　冗談
三人の妻たちを盥の中へ跳び込ませること

フランスのある町で三人の商人が夕食を共にしているとき，自分たちの妻がどれほど従順か，ということが話題になり，一番従順な妻を持つ男には，夕食の勘定を只にしてやるか，それとも豪華な朝食を与える，ということで互いに賭けをしました。そして，妻と交わす言葉は，おれは水を一杯入れた盥を持って来て，お前の前に置き，その中へ跳び込めと命令せねばならぬ，という言葉だけで，二つ返事でそれをやった妻の夫が勝ったことにする，ということで意見が一致しました。

三人は連れ立って，その中の一人の家へ行きました。その男は水をいれた盥をみんなの真ん中に置いて，妻に言いました。「いいかい，おれの命令通りにしてくれ。」妻は言いました。「ええ，いいわ，何をするの。」男は言いました。「水を入れたその盥の中へ跳び込んでくれ。」――「この私が」と妻は言いました。「この中へ跳び込んで，足を濡らしたり，靴を台なしにしようなんて，とんでもないわ。」それでもうその男は賭けに負けたわけで，ほかの二人にとても恥ずかしく，妻の頬を殴りつけました。皆は笑って，一緒にもう一人の商人の家へ行きました。この男も前の男と同じことでした。

一同は三番目の商人の家へ来ました。この男の妻は食卓と食事の用意をして，嬉しそうに言いました。「ちょうど良かったわ。さあ，皆さんお座り

になって。夕飯に致しましょう。」皆は席に着きました。そして，食事が終わったら，いよいよ盥のことをやろう，と考えていました。そして，食事の最中に，妻は調理に忙しくて，塩を出すのを忘れていました。夫は言いました。「Sal super mensam!（食卓に塩をくれ。）」妻はそれを聞き違えて，椅子にのぼり，両足で食卓へ跳び上がって，食卓と，グラスや杯などその上にあるすべての物をひっくり返しました。それで，夫婦は別の食卓を用意せねばならず，お客たちは大笑いでした。夫は言いました。「おい，食卓に跳び上がるのが，お前のできるお邸の躾なのか。」妻は言いました。「Salta super mensam（食卓の上へ跳び上がれ）と命令なさったじゃありませんか。」――「私は，食卓に塩を，と言ったのだ。しかし，『塩』と『跳び上がる』はラテン語ではよく似ている。」妻は言いました。「私はいつもそう思っていました。」ほかの仲間は，その妻に盥は免除してやることを認め，この男が一番従順な妻を持っていることになりました。

第六百五十六話　まじめ
若者に髭が生じたこと

十八歳の息子がいました。ある時息子が母親を怒らせたので，母親は息子をののしって言いました。「お前なんか，一年たったら絞首刑にされるがいい。」その通りの事が実際また起こりました。息子は盗みを働き，絞首刑にされたのです。息子が絞首刑に処せられると，息子に長い白い髭が生えました。髭を見るとその男は九十歳であるとしか思えないほどでした。皆の者が，これまで髭を剃ったことのない者に，絞首台で髭が生じたという，その兆を不思議に思いました。ある敬虔な司祭もその不思議を見ようとそこへやって来ました。盗みと母の呪いによって自身で己の生命を縮めなかったなら，この男は九十歳まで生きただろうということを，神がその兆によって示そうとされたことは明らかだ，と司祭は人々に言いました。

Honora patrem et matrem, ut sis longevus super terram etc.（お前がこの世で長く生きられるように，父と母を尊敬せよ，云々。）

第六百五十七話　冗談
キリストと結婚することを望まなかった女のこと

信心深い未亡人がいました。その未亡人は主キリスト以外の誰も夫にすることを望みませんでした。彼女は聖ペテロの所へやって来て，キリストが私を妻にするよう仲人をつとめてほしい，と頼みました。聖ペテロはそれを引き受けて言いました。「よろしい。二週間後に食事の用意をしなさい。そうすればあなたに結婚式をさせてあげます。」未亡人は喜びました。さて未亡人は多くの人にお金を貸しており，その貸金を取り立てようと思いました。金を借りている男は誰もが言いました。「奥さま，今はお金がありません。でも神が私にお金をお渡し下さるならば，私も貴方にお返ししますよ。」未亡人は再び聖ペテロの所へやって来て，言いました。「主キリストとの約束を取り消して下さい。私はキリストと結婚することを望みません。キリストは沢山の借金があります。私はキリストのためにその借金を支払うことが出来ません。」こうしてそのことから何事も起こらなかったのです。

第六百五十八話　冗談
仕立屋職人が仕事台から落ちたこと[1]

夏のこと，ある大きな町に，からかう事の好きな男が，粗末な衣服を着てやって来ました。するとおよそ五，六人の仕立屋職人の若者たちが仕事台に座って，仕事をしたり縫物をしたりしていました。そこでその男は通り過ぎることができなくなりました。職人たちがその男に向かって叫びました。「おい，何処へ行くのだ，いたずら者。」男は黙って心の中で思いました。「仕立屋たちにどんなふうにいたずらしてやろうかな。」そこで家のまわりを回ってみました。すると朝，家畜が追い立てられ，豚が仕事台の下にやって来て，柱で身体を掻くのが見られました。そしてその柱の上に仕事台があって，職人たちがそこに座っているのです。この男は夜のうちにこの柱を今にも折れそうな状態にしておきました。朝，職人たちが腰を

1　「ティル・オイレンシュピーゲル」第49話参照。

おろして仕事をしていると，豚がやって来て，柱に身体を擦りつけ，柱を押したので，仕事台が倒れ，職人たちはひっくり返りました。その時いたずら男はそこから遠くない所に立ち，職人たちを嘲って大声で叫びました。「見ろよ，見ろよ，あいつらは何と軽い奴らだろう。風があいつらを仕事台から吹き飛ばしたよ。」その後，職人たちはその男を通してやりました。

第六百五十九話　まじめ
修道女が謙遜したこと

一人のベギン会の修道女が，ある小さな家に閉じ込もり，外へ出かけることがありませんでした。なぜならその修道女は傍らに実直な女性を置き，その女性が修道女に仕え，必要な物を買い整えたからです。すると実直な婦人たちが大勢，その修道女に会おうとやって来て，修道女から良い教えを得，修道女に生活の糧を贈りました。そこで修道女は，世間からは神の身内であると思われました。でも修道女は，女中と二人だけでいる時は，自分自身を責め，とても謙虚でした。そして言いました。「さてさて私は悪い人間で，気が短かくて落ち着きを欠き，あらゆる徳にいそしむことを怠っている。でも人々は私を重んじてくれるのです。」云々。

たまたま一人の実直な婦人が修道女に会いにやって来ました。その婦人は外へ出て来ると，女中に尋ねて言いました。「おまえはあの修道女を，あのご婦人をどう思う。あのご婦人は非のうちどころがなくて，世間の人々にそう思われているような公正なお方かい。」その時修道女は窓辺に立ち，二人が話し合っていることに聞き耳を立てていました。女中が答えました。「あの方がどれほどの完璧さをお持ちなのか分かりません。あの方は妬み深くて，気が短かいのです。あの方はそういう人なんです。」修道女は窓から下へ向かって叫びました。「お前は嘘をついている。私はそんな人間ではないよ。」修道女は更に言いました。「ああ，奥様，それは女中の作り事なんです。」女中は言いました。「貴方はいつも真実を述べるお方だと思ってきました。ご自分の事をそんなふうにおっしゃってきました。貴方はご自分の事で嘘をおっしゃるとは思いません。」

このように人間はまたしばしば，自分自身の評価と同じ評価を，他人に

よってされることを望まないのです。

第六百六十話　まじめ
ファブリキウス[1]がピュロス[2]に裏切り者を送り届けたこと

ローマ人たちはファブリキウスという名前の王を戴いており，そのファブリキウスがピュロスという名前の王と戦った，とヴァレリウス[3]が書いておりますし，また聖アンブロシウス[4]も de officiis（義務について）という書物にその事を記しております。ピュロス王は一人の医師を抱えておりました。その医師がファブリキウスの所へやって来て，お金を沢山頂けるなら，戦に勝つ方法を教えましょう，と言いました。ファブリキウスは言いました。「そうか，お前はピュロス王に対してどうするつもりか。」医師は言いました。「ピュロス王に薬を飲ませてあの世に送るつもりです。王が亡くなれば，その軍隊を容易に打ち破ることができます。」ファブリキウスはその医師を捕らえさせ，捕らえたままピュロス王に送り，王に医師の計画を書き送りました。ピュロス王は言いました。「太陽がその運行をとりやめようとも，ファブリキウスが正義を放棄することはあり得ない。」こうしてピュロスはファブリキウスと講和を締結しました。医師は裁判にかけられ罰せられました。

第九十章　戦局について

第六百六十一話　まじめ
ハンニバルがワインに毒を入れたこと

カルタゴ人隊長ハンニバルは，アフリカ人を征服するために大部隊と共に送り出されました。そこでハンニバルは，ワインを積んだ何台かの馬車を運んで来るように手配しました。しかしワインには毒が入れられていま

1　Fabricius 前 4－3 世紀のローマの軍人。峻厳，廉潔をもって知られ，後世からローマ的な美徳の模範とされた。

2　Pirrus（前 319－272）エペイロス王。

3　Valerius.　1 世紀前半，ティベリウス帝時代のローマの通俗史家。

4　Ambrosius（333 頃－397）ミラノの司教，教会博士，聖人。

した。ハンニバルは敵軍を避けようとしている振りをしました。そこで敵軍はワインを見つけ，それを飲みました。こうして敵軍の多くが亡くなりました。敵軍がワインにかまけている間に，ハンニバルは他の者たちを打ち殺しました。ユリウス・セクストゥスはこんなふうに戦略第二巻に書いています。

第六百六十二話　まじめ
キュロス王がアマゾネスの人たちに食事を用意したこと

古い歴史書によると，ペルシャとメディアの王キュロスがアマゾネスの国にやってきました。そこでは王タマリスが支配していて，多数の軍勢とともに息子をキュロスの方へ差し向けました。キュロスは食べ物，飲み物，銀の食器などを載せた食卓をたくさん置いておき，味方の軍とともに逃げて，身を隠しました。アマゾネスの人たちがやってきて，食卓を見つけると，ご馳走を食べたくなりました。彼らが満腹になるとキュロス軍が襲いかかり，彼らをみな打ち殺してしまいました。

このように，悪魔は私たちの食事に罪という毒を混ぜているのです。私たちが飲み食いしすぎると，悪魔につかまってしまいます。

第六百六十三話　冗談
妻が女の子を身ごもったのか，男の子を身ごもったのかを知りたがった男のこと

金持ちの男がおり，愛する妻がいましたが，彼女に子供ができました。彼は非常に好奇心が強く，彼女のおなかにいるのが男の子か女の子かを知りたがりました。そしてどちらを身ごもっているか，本当のことを言い当てることができた人には，妻が出産して真実が明らかになった際に，二十クローネを贈りたい，と文書で公にしました。多くの人がやってきて彼に言いました。ある人は男の子だと言い，またある人は女の子だと言いました。あるとき一人の男がやってきて，真実を言い当てようとしました。しかし彼は「だんな，奥さんが私の前を歩くのを見てみないとわかりません」と言いました。金持ちは妻を呼び，男はベンチにすわりました。妻は男の前を行ったり来たりしました。金持ちは男にどうかねと尋ねると，男は言

いました。「旦那，奥さんの様子からは何もわかりません。こんなことは初めてです。彼女が私の方に向かって歩いてくるときは男の子で，私から遠ざかっていくときは女の子です。」さて彼女が出産すると双子でした。一方が男の子で他方が女の子だったのです。そこで金持ちは，彼がよく知っていたと考え，二十クローネを渡しました。

このように人は往々にしてだまされやすいものです。よく言われるように，包帯には気を付けなさい。ぺてん師がやってきて，包帯を下げたり，下げなかったり自由にできるのです。

第六百六十四話　まじめ
一日の代わりに一年を休日にしてしまった農夫のこと

カエサリウスが記すところによると，ウィーンの司教区にヴェローナという村があります。教会開基祭が平日にあたることになりましたが，司祭はその日を休日にするよう命じました。不信心な農夫がいて，彼は命令を軽んじて休もうとせず，畑に出かけようとしました。彼がすきの刃（ラテン語で vomer という）を一方の肩に担ぎ，別の農具をもう一方の肩に担いで畑に行こうとしたとき，すきの刃が足に落ち，大けがをしました。彼は一年間寝たきりになり，何もできませんでした。農夫は一日を休もうとしなかったばかりに，三百日を休むはめになったのですが，当然の報いです。

第六百六十五話　まじめ
小僧と大修道院長が幼子イエスに食事を出したこと

フランスのある修道院に敬虔な大修道院長がいました。修道院の中には若い僧である小僧たちもいて，礼拝の仕方を学んでいました。というのも，歌や話し方を覚えさせるのに，年とった鳥を鳥かごには入れないもので，巣の中で小さいときから育てた方が楽だからです。少年たちの中に，いつも自分のムースとパンをとっておいて，祭壇の上の我らが聖母の膝に抱かれた幼子イエスに持っていく者がいました。少年がおわんを取りに行くとからになっていました。さて，小僧が長い間こうしたことをやったあと，彼は無邪気にも幼子イエスに言いました。「君は不誠実なやつだ。一度くら

い僕に声をかけてよ。僕は君に食べ物を運んで，話しかけているのに，君は何も答えてくれない。」大修道院長が偶然小僧のお祈りの場に居合わせ，これを聞いて見ていました。あるとき大修道院長が小僧に言いました。「幼子イエスがお前に語りかけたら，何を言ったのかわしに教えてくれ。」

小僧が再びイエスに食べ物を持っていったとき，声がして，小僧に向かって次のように言いました。「僕のお祭りに来てくれるかい。」小僧は言いました。「いいとも。でも前もって大修道院長様に申し上げて，お許しをいただいてからでないと行けないんだ。」小僧が大修道院長に話すと，彼は言いました。「イエス様がもう一度おまえを招いたときは，大修道院長といっしょでないと行ってはいけないのだと言いなさい。」ほどなくまた食事を持っていったとき，幼子イエスは小僧に，「僕のお祭りに来てくれるかい」と言いました。小僧は「大修道院長様といっしょでないと行けない。彼もいっしょに行きたがっているんだ」と言いました。幼子イエスは言いました。「それじゃ聖霊降臨祭の日，Veni creator spiritus（来れ，創造者よ，聖霊よ）を歌い始める，第三時課のときにいっしょに来てくれ，云々。」小僧はこのことを大修道院長に言いました。大修道院長は旅立ちの準備をして，天国へ行けることをまったく疑いませんでした。

第一時課を歌っているとき，大修道院長は小僧を自分のところに立たせて，彼を思いきり抱きしめました。Veni creator（来れ，創造者よ）と歌い始めたとき，大修道院長と若い小僧はともども死んで，永遠の祭りへと行きました。

このように，私たちは謙虚な行ないによって神の恵みを得なければならないのです。

第六百六十六話　まじめ
灰をばかにした男のこと

この男は神をあざけったために永遠のばちが当たりました。ライン河畔のコブレンツで，懺悔火曜日の夜，職人たちが宿屋に集まっていましたが，朝の礼拝の頃，幾人かが寝るために家に帰りました。二人の肉屋の職人がいて，彼らはミサの鐘が鳴る朝までずっと酒を飲んでいました。というのは向かい酒を飲んでしらふに戻ったのです。一人が言いました。「教会へ

行って聖なる灰をもらってこよう。」もう一人は，「待て，俺が灰を与えてやろう」と言って，台所へ走っていき，手にいっぱいの灰をつかんできて相棒の顔に投げつけました。しかしその後まもなく神のばちが当たりました。彼は，何者かが立っていて，彼ののどにふいごで灰を吹きつけるような幻覚を感じ，窒息しそうになりました。彼がわめくと人々が急ぎ集まってきました。彼は町の外の草の上に運ばれましたが，そこはライン河のそばで，ほこりも灰もないところでした。しかしそんなことは役に立たず，彼の中には灰がひっきりなしに吹き込まれ，彼は窒息死しました。

そんなわけで，宗教的なものや，片目の人や，乙女をからかうものではありません。

第六百六十七話　まじめ
一旦は自棄を起こしたけれど，
説教によって神の慈悲を得た男のこと

ある伯爵に一人の執事兼収納係が仕えていました。この執事は毎年主人に正しい収支報告を行う実直な男でした。神のお恵みによって，この執事は豊かな収入を得て，金満家となり，その貴族のもとで多大の功績をあげていました。執事は息子たちには貴族出の娘を嫁に，娘には貴族出の男を婿に迎えました。執事はまたイエスの母，マリア様を深く敬愛し，その五つの祝日[1]にはかかさずお祝いしていました。そしてそういう日には，聖職者達を食事に招いてご馳走し，こうした祝日には貧しい人々に喜捨をしましたが，ほかのどの日でも，マリア様の御名前にかけてお願いする人がいれば，その人がその日食べるものに事欠かないように，施物を与えました。

ある時ひどい飢饉がおき，非常に沢山の人々がマリア様の祝日に施物をもらいにやって来ました。執事の主人である伯爵がたまたまそこを通りかかりました。伯爵は，何故こんなに多くの人々が集まっているのか，と尋

1　聖母マリアの祝日は宗派によって若干異なるが，聖母マリア御潔めの祝日（2月2日），聖母マリアお告げの祝日（3月25日），聖母マリアの聖エリザベス御訪問の祝日（7月2日），聖母マリア被昇天の祝日（8月15日），聖母マリア御生誕の祝日（9月8日），無原罪の御宿りの祝日（12月8日）等がある。

ねました。執事がマリア様の祝日にはいつも施物をしているからだ，と告げられました。すると伯爵は怒りだして，言いました。「あの男はわしよりも派手なことをしおる。そんなこと，わしの金をくすねずして，できるわけがない。」そして伯爵は執事を捕らえさせ，牢につないで，こう言いました。「そこから出てきたければ，十万ポンドだせ。」捕らわれた執事は答えて言いました。「旦那様，私の全財産をあわせてもその半分にもなりません。」

執事は牢を出られず，娘婿，息子，嫁をよびよせて，皆で力をあわせて，自分に力を貸してくれ，と頼みました。一同はこの件について相談し，一同全員が苦労するよりは執事一人苦労するほうがまだましだ，と伝えさせました。執事は以前厚意を示してやり，ワイン，獣肉等でもてなした貴族たちに来てもらい，この件で自分が釈放されるよう取り計らってくれ，と頼みました。貴族たちは相談して言いました。「この執事は我々にいろいろと厚意を示してくれた。もし今我々が執事を助けてやらないと，貴族は世間からもう厚意を示してもらえなくなり，我々は恩知らずだと噂されよう。執事の子供たちや婿は助けようとしなかった。」貴族たちは領主である伯爵のところへやって来て，保釈金を軽減してやってほしい，とあわれな捕らわれの身の執事のために願い出ました。暴君は言いました。「その金額は動かせない。」貴族たちは執事のために莫大なお金を都合し，保証人，債務者になってやり，執事の全財産を売ってやり，伯爵は所定の額が支払われるまで毎年この土地から地代を受け取り，この地租，地代は伯爵の死後その相続人に引き継がれるようにしました。この取決めを伯爵は承諾しました。関係書類が作成されますと，伯爵は捕らわれの身の執事を牢から出しました。

さて執事は釈放されると，こう考えました。「今ではお前はみじめな貧乏人だ。これからどうするつもりか。お前にはもう家も屋敷もない。どうやって妻や子供を養っていくつもりか。この土地から出て行こう。故郷の見知った人々の間で物乞いするよりは，見知らぬ人々の間で物乞いするほうがましだ。」こうして執事が故郷を去り，ある森のなかを通っていきますと，一人のおかしな若者が木のうえに登り，木から木へ軽々と飛び移るのが見えました。若者は笑い声をあげ，楽しそうでした。貧しい執事はその

若者に尋ねました。「お兄さん，君の名前は何というのだ。なぜそんなに上機嫌なのだ。」若者は言いました。「あっしは悪魔だ，上機嫌なわけは，旦那が不幸な目にあっているからだ。旦那は以前からキリストとその母親に仕え，マリアの祭日，祝日にはたんまり施物をなさった。ところがあの二人が旦那に与えた報酬はこのざまさ。旦那があっしに仕えていなされば，いや，これから仕える気がおありなら，あっしは旦那を金持ちにし，嫌なことは忘れさせてあげまっせ。」執事は言いました。「どうすればいいのか。」すると悪魔が言いました。「神と洗礼を拒めばいいんでさ。それとあっしに誓いをたててください。」自棄を起こしていたこの貧しい執事は誓いをたて，神の救いと洗礼を諦めました。悪魔は，「あっしが旦那を見分けられるよう，印をつけときまっせ」と言って，執事の左腕に指で穴をあけましたが，痛みはありませんでした。そのあと悪魔は執事を木の下へ連れていって，こう言いました。「この石を取り除き，少し掘ってみなせい，宝物が出てくるから。お金がいるときは何時でも，それがここで見つかりまっせ。」

執事がそこを掘ってみますと，クローネ金貨，グルデン金貨，その他のお金がたんまり出てきました。執事は再び故郷へ引き返し，自分の家屋敷，銀の食器類，それに質に入っているものを受けだし，伯爵に借金を返し，以前同様の豪勢な暮らしをして皆を驚かしました。執事は以前のように聖母マリアの祝日に聖職者たちを客に招き，貧しい人々に喜捨，施物をすることを再開しました。

ある時老若多数の貧民がつめかけ，施物を手に入れようとしました。四人か五人のわがままな若者がいて，全くの腕ずくで人々をかきわけて進み，施物を最初にもらおうとしました。そういう時にありがちなことですが，他の人々もかきわけて進み，一人の子供が押されて，母親の手から地面に落ち，踏みつぶされました。人々が立ち去ると，母親は息絶えた子供を抱き上げて，はげしく泣きました。施物を配っていた例の執事は，その母親に尋ねました。「奥さん，大事なお子さんだったんでしょうね。」母親は言いました。「はい，神様の次に大事なのがこの子でした。」執事は言いました。「御愁傷様でした。」母親が言いました「恐れいります，でも私はこの子を主なる神様に差し上げるのです。私にこの子をお与えになった方

が，この子を再びお取り上げになったのです。神様はお与えになり，お取り上げになります。神様の御名に祝福がありますように。」執事は，母親がその子を埋葬する費用にとグルデン金貨を一枚与え，自分が貧しさや不幸を神に委ねなかったことを反省し，また自分が神を拒み，少しお金をもらったからといって，悪魔に身を委ねたことを後悔し始めると同時に，自責の念に駆られ始めました。

そうこうしているあいだに，二人の修道僧が執事の家へ来て，一夜の宿を頼みました。執事は二人を招き入れ，食事をさせ，二人の間に座りました。しかし執事自身は何も食べず，ため息をつき，こう考えました。「ここで告解できたらなあ。」二人の修道僧は寝室へ案内されると，互いにこう言いました。「この家の主人には何か大きな悩み事がある。」そして夜があけると，二人の修道僧は出掛けようとしました。その時主人が言いました。「お立ちになるまえに，朝食をしていってください。あなた方のお一人がミサを読み，少しばかり説教してください。だって，ここでは説教はめったにないことですから。」修道僧の一人がミサを，他の一人が祭壇の儀式をとりおこない，ミサのあいだに神の寛大なる慈悲について説教しました。主人は礼拝堂のそとの窓のところに立ち，修道僧の説教を聞き，己の罪を悔いていました。食事が終わり，修道僧が立ち去りますと，主人は下男と犬を呼んで，言いました。「狩りに行こう。」野外に出ますと，主人は下男に言いました。「お前は狩りに出て，獲物を探せ。私を待つ必要はない。私はあの修道僧と話があるのだ。」そして主人は修道僧と森のなかへ入っていきました。そこで主人は修道僧に告解して，それまでに自分の身に起こったことを話しました。主人は免罪され，己の罪についての贖罪を受けました。

二人の修道僧は，主人の姿が見えなくなると，ひざまずき，神様にお願いしました，あの主人が悪魔から解き放たれたかどうか，主人にわかるよう，啓示を与えてやって下さいと。神様は修道僧の願いをお聞き入れになりました。主人が家路につき，森からまだ出ないうちに，一人の立派な若者が木の枝にすわっているのが見えました。その男はかなり落胆している様子で，髪の毛を掻きむしり，自分の衣服を破り裂いていました。主人はその男に言いました。「お兄さん，君はどなたかな。何故そんなにがっかり

していなさる。」男は主人に答えて，言いました。「あっしは悪魔だ。あっしに家来が一人いたんだが，そいつを見失って，いまどこにいるのかわからないんだ。」主人は言いました。「そいつに会えば，わかるかね。」悪魔は言いました。「会えば，わかると思う，とりわけあっしがつけておいた印で。あっしはそいつの左腕に穴をあけといたのだ。旦那がそうじゃないかな。腕を見せな。」主人はびくびくしながら，着ているものを脱ぎました。悪魔は主人の腕を調べて，言いました。「いや，旦那じゃない。旦那には穴がない。」それというのも神様がその穴をいやしておかれたのです。こうして主人は主なる神に感謝しました。

このお話は，説教する人の知性がそれと見分ければ，様々な材料に役立ちます。

第六百六十八話　冗談
神の意にかなう者は朝早く食事しなければならなかったこと

二人の若い修道士が院長のところに来て，「縁者に会うことを許して下さい」と，頼みました。院長は二人に許可を出し，教育係になるよう年老いた敬虔な修道士をつけました。若い修道士たちは軽薄だったからです。修道士たちは朝出かけて行きました。一マイルほど行くと，老修道士は言いました。「ねえ，お前さんたち，村で朝食を取りましょう。食べないともう歩けませんよ。」若い修道士たちは言いました。「まだそんな時ではありませんよ。あなた方お年寄りは朝早く食事をしたがって，私たち若者に悪い模範をお見せになる。」老修道士はその場を動きませんでした。それで若いいたずら好きの修道士たちは，老人から免れ，勝手に動けるので上機嫌でした。

老修道士は二人の若い修道士の姿がもう見えなくなったので，僧衣を脱いで，修道院から流れてきた水の上に広げ，水の上に十字を切り，僧衣の上に座りました。水は修道院まで逆流して行きました。院長や他の偉い方々は，老修道士が乗って来るのを見て，老修道士に食べ物を捧げました。院長は，「あなたの中にある，この上なく神の意にかなうものは何ですか。何によってこんな不思議な術を身につけたのですか」と，尋ねました。老修道士は言いました。「私に何か神の意にかなうものがあるなど，何も分か

りません。だけど神様の御心にかなうものが，何か私にあるとすれば，それは神様が私やその他の人間と共になさることが，私の心にかなうということなのです。神様が天気をお作りになり，地上をお治めになる様子が私には快いのです。」

この僧はこんなふうに言うことができたでしょう。Fiat voluntas tua.（あなたの意志がなされますように。）「御心がなされますように。」[1]

第六百六十九話　冗談

ぶどう酒を三ペニヒ半と大声で叫んでしまったかささぎのこと

ぶどう酒店主がいて，かささぎを鳥籠に入れて家の前に吊るしていました。この鳥は人の言葉を話すことができ，教えられたことをぺらぺら口にし，ぶどう酒がいくらなのか大声で叫ぶことができました。ところで，二日で一樽売れてしまわないと，ぶどう酒は一ヘラー値引きしなければならない，というのが慣わしになっていました。亭主はかささぎに，もとは三ペニヒ半で売っていたぶどう酒を，三ペニヒで呼び売りをするように教えました。するとかささぎはそれを逆にして，言いました。「もとは三ペニヒのぶどう酒が今は三ペニヒ半だよ。」店主は訂正して教えました。「もとが三ペニヒ半だったものが，三ペニヒでなのだぞ。」かささぎはぺらぺらしゃべり，相も変わらず叫び続けました。「もとは三ペニヒだったものが，三ペニヒ半でだぞ。」亭主は怒って，鳥籠を取って汚物の中に投げつけ，かささぎはすっかり汚くなってしまいました。その後で再び亭主は鳥かごを吊るしました。そこへ酷く汚れた一匹の豚が走ってきました。するとかささぎは豚の頭上で叫びました。「もとは三ペニヒだったものが，三ペニヒ半だと大声で叫んでしまったのか。」

フランシスコ・ペトラルカはかささぎについて話しています。かささぎは教えられたことが思い出せないとやたらにしゃべりたがるもので，苦しんで死ぬ羽目になることを忘れてしまっていたのです。

1　使徒言行録第21章第14節。

第六百七十話　まじめ
神様のために神様に仕えること

荒野に一人の老隠者がいました。そこにはまた若い隠者が一人いて，神に仕えていました。ある時悪魔が善良な天使の姿で老隠者のところに現れて，言いました。「私は神によって，お前のところに遣わされた。若い隠者の命は尽き，その善行も全て無になるであろう。」老隠者は仰天し，若者を見ては，ため息をつきました。若者はその様子に気付き，ある時「何があったのですか，言ってください」と，尋ねて言いました。しつこく尋ねられた後，老隠者は天使が語ったことを若者に話しました。若い隠者は言いました。「隠者様，こんなことで気を煩わせないで下さい。私はこれまで神様ご自身のために，神様にお仕えしてきたので，天国のためでも，地獄のためでもありません。神様が私に永劫の罰を下されるのなら，私は喜んで罰を受けましょう。それでも私は神様にお仕えすることを止めようとは思いません。」その後で老隠者のところに本当の天使が現れ，「若い隠者は神様の縁者であり，地上にとどめおかれる。この前の天使は悪魔であったのだ」と，言いました。

だから神様ご自身のために神様に仕えることが人々の心の安らぎを得るのに役立つのです。

第六百七十一話　まじめ
偶像に石を投げた男のこと

ある時修道士たちが不信の徒たちによってある町から追い出されました。そこで修道士の七人はある森にやってきました。するとその中で最年長の者が言いました。「皆さん。九日間沈黙の行を守り，黙っていましょう。」みんなそうしました。しかしかの年長者は毎朝別の森の中に入って行きました。そこには偶像が立っていたのです。そこで僧は偶像に石を投げました。晩にはその前に膝まづいて偶像に許しを乞いました。ところで沈黙の九日間が過ぎたので，みんなは集まってきて，それぞれお互いに関心のあることを話しました。その場で修道士たちは年長の僧に，「どうして毎朝偶像に石を投げ，晩にはその前に膝まづいて偶像に許しを乞うたのです

か」と，尋ねました。年長の僧は言いました。「皆さん。私が偶像に石を投げ，そのことの許しを乞うたとき，偶像は私に何を話しましたか。」修道士たちは言いました。「あなたが偶像と何を話したのか何も聞いてはいませんよ。」そこで年長の僧は言いました。「皆さん，みんな一緒にいて，仲良くしようとすれば，我慢し，私たちがよい目にあおうと悪い目にあおうと黙っていなければなりません。沈黙を守れば平和で，誰も人と争わないものです。」

第六百七十二話　冗談
口を火傷した四人の修道士たちのこと

四人の修道士たちが，一緒に旅に出て，宿屋に入って，ちょっとした食事をしようと思いました。大変腹が空いていたのです。宿の亭主は熱々のうまそうな小麦のムースを出しましたが，それは大変熱いものでした。第一の修道士はスプーンにすくい，口にさっと持ってきて，口を火傷し，目に涙を浮かべました。第二の修道士は「どうして泣くのですか」と，尋ねました。かの修道士は言いました。「このあいだ私の母親がなくなりました。そのことを思い出して，泣かざるを得なかったのです。」第二の修道士が言いました。「今は食べることが大切で，泣いてはいけません。」この修道士もムースを一匙さっと口に持っていって，口を火傷し，目に涙を浮かべました。第三の僧が「どうして泣くのですか」と，尋ねました。第二の僧は言いました。「私の父上の死を思い出したのです。」すると第三の僧も口を火傷して，言いました。「私は偉大な縁者たちを思い出しているのです。」第四の僧も泣きました。すると他の三人はなぜ泣くのか尋ねて，笑いました。第四の僧は言いました。「私は，あなた方はみんなひどい方々なのを，悲しんで泣いているのです。あなた方の修道会にも，昔は大変敬虔な修道士方がおられたものです。」

第六百七十三話　冗談
蜜蜂に刺された百姓のこと

ある時，ある村の一人の百姓が村長のところにやって来て，蜜蜂の巣の前を歩いて行って，蜜蜂の一匹に残忍な目に会わされ，蜜蜂になにも危害

を加えないうちに，針で刺されたと訴え，公正な裁きを求めました。この村長は，彼がどんな商売をしようとしているかをよく見てから，彼に言いました。「力を使え。敵の一人を見たら，拳で頭をぶん殴れ。」判決が下された時，一匹の蜂か蜜蜂かが，村長の帽子の上に飛んで来ました。この百姓は，村長になにか言おうとするように，そっと村長の方へ寄って，拳をさっと動かして村長を殴りましたので，村長は，もう少しで椅子からひっくり返るところでした。

第六百七十四話　まじめ

聖ベルナール[1]が姦淫を行っている男に，聖なる秘蹟を与えたこと

聖ベルナールがある時，馬で旅に出ましたが，その時秘蹟を持った司祭に出会いました。彼がその司祭に，どこから来たのかと尋ねますと，司祭は言いました。「私はある百姓のところにいて，秘蹟を与えようとしました。すると適当でないことが分ったので，秘蹟を与えようとは思いませんでした。というのは，彼のところには女がいて，その女を離すことができないからです。」聖ベルナールは言いました。「私と一緒にもう一度戻りなさい。」二人はその病人のところにやって来ましたが，聖ベルナールはこの司祭の前で病人に，「女を追放して離れることができないのを，残念に思っているのか」と，尋ねました。病人は答えました。「はい，それ以上に残念なことはありません。あの女のことは，二度と考えないようにするのを望んでいます。」すると聖ベルナールは言いました。「秘蹟を授けなさい。受ける用意が十分できている。」この病人は秘蹟を受けると，その女の敵となり，女を捨てました。

こういう訳で，後悔と愛というものは，感情ではなく，理性の中になければならないのです。

1　Bernhard de Clairvaux（1091－1153）のこと。フランスのキリスト教神秘主義者で，クレルボーに修道院を創設。シトー派の教団を改革し，第2次十字軍を提唱した。1173年に聖人の列に加えられる。

第六百七十五話　まじめ
三本の百合の花がマリアの純潔を証明したこと

聖者，聖フランシスコの同僚の一人，修道士エギディウスという名の人の話です。この人のところに一人の異端者が来ました。この男は，イエス生誕の前においても，生誕の時においても，また生誕の後においても，マリアの純潔を信じようとはせず，信ずることができませんでした。この聖エギディウスは，それを実証してこの信仰を動かぬものにしようとして，若枝，一本の長いむちを取り，地面を叩いて言いました。「マリアはイエス生誕の前は処女である。」すると一本の美しい花，百合が伸びて来ました。二度目に大地を叩いて言いました。「マリアは，イエス生誕の時に処女である。」すると再び一本の花が伸びて来ました。三度目に地面を叩いて言いました。「マリアは，イエス生誕の後も処女である。」すると三本目の百合が伸びて来ました。この異端者は，心を改め信心深くなりました。

第六百七十六話　まじめ
二つの教えを夫婦に与えた修道士のこと

ある時一人の市民が，上述の修道士のエギディウスのところへやって来て，結婚している妻と関係しても，大罪を犯すことになるのかと尋ねました。エギディウスは彼に問い返して，寝台の枠に綱を張る時に釘を次々に打つように，問いには問いでお返しになり，言われました。「あなたは自前の酒でも酔えますか。」彼が肯定すると，「過ぎれば，この場合もそうなる」と，申されました。

さらにこのエギディウス修道士は，たとえ話をされ，こう言われました。「ある人が別の人と盤上でゲームをしていました。この人はさいころの一の目をだして，そのゲームに負けます。このように大罪は，人間が行った善行をすべて台無しにするのです。」

第六百七十七話　冗談
息子がそれぞれ，どういう鳥になりたいかということ

一人の領主がいました。この人は国や人々を治めていましたが，三人の

息子がおり，どの息子にその国の統治を任せるべきか迷っていました。それで三人を呼んで，三種類の鳥を示して，それによって，それぞれがどんな性質であるか知ろうとしました。こう言いました。「お前たち，ここに三種類の鳥がいる。まず鷲であるが，鷲はあらゆる鳥を支配する。つぎに，はい鷹のような鷹の類，最後に鳩，こうのとり，あとり，四十雀等がいる。お前たちは，選ぶとすれば，それぞれどの鳥になりたいか。」一番上の息子が言いました。「私は鷲になりとうございます。すべての鳥を従え，意のままにするのです。」次男が言いました。「それなら私は鷹になりとうございます。貴族たちが私を大切にし，気晴らしや喜びを私と共にするのです。」三男が言いました。「それなら私は，小鳥の中の一羽になりとうございます。一緒に大勢で飛んで沢山の友を持ち，大事なことがあれば，彼らから助言を受けるのです。」そこで父は，あらゆる事柄を助言を受けて行うなら，この息子に統治を任せようと考えました。

第六百七十八話　冗談
誠実さを試された妻のこと

一人の男がいました。この男は，自分の妻が浮気をしていると告げられましたが，その言葉を信じようとしないで，自分で妻を試して確かめようとしました。ある日の朝，船で出かけて三日間は帰らないかのように振る舞いました。その日，妻は愛人たちを招き入れて，どんちゃん騒ぎをしました。夜になると，また一人の男を呼び寄せました。その夜この夫は帰って来て，家の戸を激しく叩きました。妻は窓から顔を出して，そこに誰がいるのか尋ねました。彼は答えました。「お前の夫だ。おれの声が分らんのか。」妻は言いました。「主人は今日船で出かけました。お前はごろつきでしょう。私をだまして，まじめな女の私を辱しめようとするのですか。夫が戻って来るまでは，男は一人も家の中に入れませんよ。」こうしてこの夫は，家の外にいなければなりませんでした。間男は家の中にいたのでした。そこで夫は，自分の妻がいかに誠実であるかを知ったのです。

第六百七十九話　冗談
チーズの代わりに石を食べて泥棒にされたこと

ある大学，あるいは学生寮に一人の学生がいました。この男はかつがれると，自分に言われていることが本当だと思いました。ある時ヴィルギリウスの本が盗まれて無くなりました。学生たちは，例の与太郎をだまして，ヴィルギリウスの本を盗んだと，彼に信じ込ませようとしました。それで学生の一人が言いました。「みんなにチーズを一切れ，パンなしで食べるように渡します。そのチーズを全部に食べられない者が，泥棒というわけだ。」そして一切れのチーズに小石を入れ，それを例の与太郎に渡しました。学生たちはチーズを食べきりましたが，彼はチーズを食べきることができず，自分が泥棒だと信じ込みました。

第六百八十話　冗談
自分は水腫症だと思い込まされた男のこと

学生たちはこの与太郎に，自分は病気で水腫症なのだと思い込ませようとしました。ある夜学生たちは与太郎のズボンを細くさせました。朝になって与太郎がズボンを穿こうとすると，足が太すぎました。それで与太郎は足がむくんだのだと思いました。そしてまた別の夜に，学生たちは与太郎のジャケットも小さくさせました。与太郎が朝ジャケットを着ようとすると，腹が大きすぎました。それで与太郎は腹がむくんだのだと思って，医者を呼びにやらせました。

このように，二人の人間がある人にあることを思い込ませ，三人だと阿呆にしてしまいます。これが幾人かの人たちの勉学というもので，stultum in supino in universitatibus（大学には大学にふさわしくない愚があるのです。）

第六百八十一話　まじめ
ペラギウスが投げられたこと

かつてトルコ人の暴君がいて，キリスト教徒を迫害し，セネカが生まれたコルドバという町を手に入れました。その後暴君はスペインへ行って，

沢山の伯爵領と土地と民を勝ち取り，その地から何人かを捕えて連れて行き，その者たちの身代金を要求しました。暴君はある時一人の立派な領主に打ち勝ち，身代金を要求しました。領主は暴君が求めるものを与えることができませんでした。そこでトルコの暴君は，領主かあるいはその息子を担保として，一緒に連れて行こうとしました。息子はペラギウスという名でしたが，父にこう言いました。「僕が牢に入るよ。僕の方がお父さんより上手く堪え忍べるし，仕えることもできるから。お父さんは年を取っていて，体も弱っている。でも僕はまだ若いし，丈夫だもの。」父親は言いました。「私はもう余命幾ばくもない。そしておまえはまだ若い。おまえはまだ国のために役立ち，有益であることができる。私が連れて行かれる方がよい。」結局，若いペラギウスが連れて行かれ，牢に入れられました。

トルコの暴君の召使いたちは暴君に，ペラギウスを牢から出して仕えさせるようにと助言しました。召使いたちは暴君が男色家だということをよく知っていたからです。暴君はペラギウスを自分のところへ連れてくるように命じました。ペラギウスは痩せて不格好になっていましたので，召使いたちは彼が暴君のテーブルの前に立てるように，美しい衣服を着せました。ペラギウスが暴君にしばらく仕えた時，暴君は彼がとても気に入って，ある時彼をしかるべき場所へ連れて行って，求愛し始めました。暴君はペラギウスに，「俺と寝ろ。金持ちにしてやるから」と言い，一国を譲り渡すと約束しました。ペラギウスは言いました。「御主人様，私はキリスト教徒です。私はそういうことをしてはならないのです。今後私に関してそのようなことをもうお考えにならないでください。」こうしてそのままになりました。

その後間もなく暴君はまたペラギウスのそばに腰をおろして，接吻しようとしました。ペラギウスは拳をふりかざして暴君の顔を殴ったので，暴君の口と鼻から血が出ました。暴君は，ペラギウスを投石器の中に入れて，彼らの国のしきたりに従って，川向こうの標的めがけて投げるよう命じました。人々は皆川向こうへ走り出て，ペラギウスがどのように砕け散ってしまったかを見ようとしました。ところが人々はペラギウスがそこに腰をおろしているのを見ました。彼の身には何も起こらなかったのです。そのことが暴君に伝えられました。すると暴君は，ペラギウスの首を打ち取っ

て，体を川に投げてしまえと命じました。それがなされて，体と首は川を流れ下って行きました。

そこにキリスト教徒の漁師たちがいて，その体を拾い上げました。漁師たちはこの者がキリスト教徒であったということがよくわかりました。そして大きな焚火をして，その中へ頭を置き，もしこの者が真の殉教者であるならば，火がこの者を害さないという徵（しるし）を自分たちに与えてくださるように，しかしそうでなくてこの者が敬虔なキリスト教徒であるなら，この者が額に徵を持つようにと，神に願いました。漁師たちが火から頭を取り出すと，それは金よりも美しく，まるでまだ生きているかのようでした。こうして漁師たちはこの人を殉教者とみなして，神を称えました。

第六百八十二話　まじめ
神の隠された摂理について，三つの例

ヤコブス・ドゥ・ヴィトリアコ[1]が書いているところでは，かつて信心深い隠修士がおりましたが，この人はこの世で珍しいことを大変沢山見て驚きました。そして神に，神の隠された摂理について自分に何か見せてくださるようにと願いました。神は隠修士の願いを聞き届けようと思われ，彼のもとに一人の天使を送りました。天使は隠修士に言いました。「私と一緒に来なさい。おまえに神の隠された摂理を見せてやろう。」

そして二人は広い野原にやって来て，馬に乗った一人の男に出会いました。男は金の入った財布を落としましたが，それに気付きませんでした。そこに一人の羊飼いがやって来て，その財布を見つけて持って行ってしまいました。商人は財布をなくしたことに気付くと，再び戻ってきて路上で財布を探しました。そして一人の若者を見つけて，財布を見つけなかったかと尋ねました。そうしてこの若者から金の入った財布を奪おうとしました。それでけんかになり，商人は刃物を抜いて，若者の片足を切り落としたので，若者はびっこになってしまいました。隠修士はそのことにびっくりました。天使は言いました。「驚くではない。男が金をなくしたが，その

1　Jacobus de Vitriaco (Jakob von Vitry) 1240年没。フランスの神学者で十字軍の説教師。

金はあの羊飼いの財産と労働から得られたものだ。だから羊飼いはそれを持って行って当然なのだ。若者は自分の母親を足で蹴ったのでびっこになった。それで罰せられたわけだ。」

天使は隠修士をさらに先へ連れて行きました。そして荒野で一つの庵の中へ入って行きました。二人はそこで一人の隠者を見つけましたが，ライオンがこの人を引き裂いてしまっていました。隠修士は言いました。「ああ神よ，この人はどうしたというのですか。この人は四十年も神にお仕えしたのにこんなに悲惨な死にかたをするなんて。」二人はもう一つの庵に入って行き，一人の隠者が木に腰掛けているのを見ました。天使は隠者と話をしました。隠者は言いました。「私は四十年間，また俗世間に戻るかもしれないという不安を持ち続けていました。」二人が立ち去る時，天使はこの隠者を木から投げ落として，死なせました。隠修士は言いました。「あんたは悪魔じゃないのか。」天使は言いました。「神の摂理は隠されたものだ。それをおまえに教えてやろう。ライオンはあの隠者を殺した。というのは，死によって隠者は煉獄に落ちるのを助かったのだ。それを彼は長いこと神に願っていた。私が投げ落として死なせた隠者，あれはもしもっと長く生きていたとしたら，再び俗世間に戻って行って，地獄へ落ちていただろう。そうならずに彼は今救われているのだ。」

天使は隠修士をさらに連れて行きました。そして二人はある市民のところへやって来ました。この人は二人を快く迎えて，二人に銀の杯で飲物を与えました。翌朝二人が去る時，天使は銀の杯を盗みました。二人は先へ歩いて行きました。その時二人は一人の貴族に出会いましたが，貴族は彼らをひどく罵りました。その貴族に天使は銀の杯をやりました。二人はさらにある金持ちのところへやって来ました。男は二人を泊めてくれました。そして翌朝天使はこの家の主人に，橋を渡って出て行く道を案内してくれるように，自分たちに息子を貸してくれと頼みました。彼らが橋の上にやって来ると，天使は少年を橋の上から川の中へ投げ込みました。少年は溺死しました。天使は隠修士に言いました。「私はあの市民が地獄へ落ちないように銀杯を取ってきたのだ。というのはあの銀杯はまっとうな財産ではなかったからだ。私はあの銀杯を，死に値する大罪の中で行った善行に対する，現世での報酬としてあの貴族にやったのだ。あの父親の息子を

私は溺死させた。というのは，息子を持つ前にはあの男は偉大な慈善家だったのに，それをぷっつりとやめてしまって，息子に立派な財産を残してやるために，不当に財を手に入れ始めもしたからだ。」

隠修士はそれを聞いても，もう驚きませんでした。

第六百八十三話　まじめ
福音書の告げたごとく山を動かすこと

一人の裕福な商人がおりました。その名をアマーヌスといいました。ある時，アレクサンドリアに渡ろうと志しましたが，その船が衝突し壊れてしまったのでした。一体に，海路でゆくほうが，陸路でゆくよりも不安が無かったのでそうしたのでありましたが。そしてこの商人は，その所有の一切が烏有に帰し，アレクサンドリアには丸裸で到着したのでありました。誰かが投げ与えてくれた一枚の上着を身に着けると，その商人は三日もの間，ひもじい腹をかかえて町を歩きました。そして，小さな店に腰かけていた一人の靴直しの許にやってきました。商人は，その手職を教えて貰えないだろうか，実は私の身の上はこれこれしかじか，自ら口に糊してゆきたく思っているのですと，靴屋に頼みました。靴屋は男を雇ってくれました。そして仕事を教えてくれましたが，商人が一人立ちできるようになったころ，この親方は死んでしまいました。アマーヌスは親方が遺したその店と一人の徒弟を引き継いで，独立しました。

ある日のこと，福音史家の聖マルコがこの地を訪れました。聖人は片方の靴の当て皮が取れたので，修理させようと思われ，れいのアマーヌスのところにおいでになりました。靴屋は補綴革をその靴に当てました。聖マルコは台の上に横になり，靴屋の仕事に見入っておりました。アマーヌスはそのお方をつくづく眺め，なんともいえぬ神々しさがそのお顔から現れているように思われたので，うっかりしていて，突き錐で手を刺し通してしまいました。「わあっ，痛ててえ」と，靴屋は叫んで言いました。聖マルコはその傷に唾をぬりました。すると忽ちにしてその傷は，元どおりに癒えてしまいました。こうして，聖マルコは靴屋に教えを説き，洗礼を授け，キリストへの信仰に導き，さらに，ご自分の福音書を遣わされました。

聖マルコは旅立ちました。アマーヌスはいよいよ信仰を深め，多くの教

徒を増やし，偉大な奇跡を行いました。ある時，こんなことがありました。バビロニアのユダヤ人たちがキリスト教徒を追い払い，殺してしまったらよいと思い，皇帝のところに行って申したのでした。「陛下，あなたはこの地方に山を持っておられ，できればそれを取り除きたくお思いになっていらっしゃいます。キリスト教徒をお呼び出し下さい。そして，その場から退くよう山に向かって言わせて下さい。それができなければ，お前たちの信仰は邪なのだから，命じて殺させるぞと，このように彼らに仰って下さいませ。なぜなら，キリストはマタイによる福音書第十七章で，『もし，からし種一粒ほどの信仰があれば，この山に向かって，『ここから，あそこに移れ』と命じても，そのとおりになる。』と申しているのですから。」皇帝は司教を呼び寄せ，先ほどのことを指示しました。司教は暫時の猶予を乞い，それから，神様が人々の信仰を失わせないよう，キリスト教徒たちに三日間の断食と，祈りを課したのでありました。天使が司教の許に姿を現して伝えるのに，山に立ち退くよう命じるには，他の誰にもまして，片目の靴職人，アマーヌスがもっとも相応しいとのことでしたので，司教はアマーヌスのところに使いを出しました。そして，アマーヌスが来たとき，山を動かすその期日が定められました。その当日，アマーヌスは山に立ち退きを命じました。すると，山は神様のおぼし召し通りに退き，移動したのでした。その時，山は海を行く一隻の船のように動き始め，バビロニアの町に向かって走ってゆきました。これを見て皇帝は愕然とし，山が町全体を滅ぼしてしまうのではないかと恐れました。そして，もう鎮まり，留まってくれるよう山に向かって命じて欲しいと，アマヌースに懇願しました。その通りにアマヌースが実行しましたところ，山は動くのを止め，そこに今も留まっているのであります。

このアマヌースは，福音書で，「汝の眼がもし汝を悪しきに誘う時は，すなわちその眼を剔り取れ」という，言葉を読んでいて，その通りに実行していたのでした。つまり自らその一眼を剔り抜いたのでした。それは，二人の綺麗な女がアマヌースの店の前を通った時，その女たちに見とれてしまい，ことのほかに欲情を感じ，聖書の言葉を正しく理解しなかったという事があったからです。そんなわけで，山に命令するようにとアマヌースが選ばれたのでありました。

第六百八十四話　冗談
五人の殉教者が山を海に投げ入れたこと

ある高位の異教徒について読みます。この人は五人の者，すなわち五人の殉教者を牢獄に繋いでおりましたが，ひどい責め苦を彼らに加えたあとで，尋ねました。「何が，そのような頑くなまでの信仰をお前たちに与えるのだ。」五人は言いました。「私たちの主キリストは，『もし，信仰の証をすべきとき，からし種一粒ほどの信仰があれば，山に向かって『立ち去り，海に落ちよ』と言えば，山は汝に従順ならん』[1]と，このように申しているのでございます。」この異教徒は言いました。「そこに山がある。わしにとっては邪魔なものじゃ。その山を動かしてくれぬか。それができたら，わしもキリストを信ずることとしよう。」五人の殉教者は一週間の猶予を貰い，その間に告解をし，祈り，断食をしました。

当日になると，沢山の異教徒たちが馬や徒歩で集まってきました。女も，男も，そして子供も。彼らはその山の上で，腹いせや鬱憤晴らしをし，罵声を浴びせて言いました。「この山がどのように立ち上がるものか，お目に掛かりたいもんだ。」その時，五人の殉教者が現れ，山に向かって，「海に落ちよ」と，命じました。すると，山は弩から放たれた矢のように走り始め，海中に落ちこみました。山の上にいた人々は皆溺れ死んでしまいました。五人の殉教者たちは放免され，かの異教徒は洗礼を受けたのでありました。

第六百八十五話　まじめ
ノンノーススが山を動かしたこと

聖グレゴリウスは「対話篇，第一の書」で，祈禱の力で岩を造作なく片付けたノンノーススという名の昔の聖人に触れています。

これと同じように，私たちがラムペルーツィーカの歴史で読むところで

1　第683話の言葉とも少し異なる部分があり，「マタイによる福音書」第17章20節と第21章21節が一つになったものと思われるので，新共同訳聖書によらずそのまま訳してある。

は，聖ミカエルが，フランスのアムブリアークスの町から遠くないツムバという山の上に姿を現すことによって，啓示をお与えになった折に，人々は聖ミカエル教会を建てようと思い立ったのでしたが，それは，時しもキリスト生誕後七百十年という年でありました。この教会はアプリア地方の，シポンツスの近く，ガルガノ山上に現存している教会に倣っているのであります。長い物語によれば，そこには二つの岩がありましたが，ある聖人が聖ミカエルの命じた通り，造作もなくそれらを肩で押し退けたといいます。聖ミカエルの祝日には，諸聖人の生涯におけるこの物語をお読みください。

第六百八十六話　まじめ
乙女が花婿キリストからの指輪を見いだしたこと

ヨハネスの書いているところによれば，一人の乙女がニュルンベルクから遠くない或る村に住んでいたとのこと。彼女は独り家を守り，菜園を作り，そこに菜っ葉を育てて食べ，一匹の雌牛を飼ってそこから生計を立て，お説教を聞きにニュルンベルクの町へ欠かさず出かけてゆき，神様を愛し，純粋な気持ちでお仕えし，神様に誓いを立ててその純潔を守り，神様を夫としていたのでありました。そして悪霊の激しい誘惑に耐えていました。その誘惑が激しさを増せばますほど，いよいよ彼女は強められました。同様に，その乙女は，キリストが自分を花嫁にしてくれたのか，あるいは花嫁にしてくれなかったのか，できればその証を得たいという思いにかられていました。聖マルチンの祝日の日，娘は菜園に出て，み印の得られるよう祈念し，思いました。「そうだわ，なにか印が見つかるかも知れない，隅を捜してみましょう。」こうして娘が捜してみると，そこに三本の菫が見つかったのでありました。娘は喜び，菫を折り取ると，それらを手元に所持していました。というのは，聖マルチンの祝日[1]にあたって，庭で菫を見つけるとは素晴らしいみ印であったのでした。菫は三月に咲いてくる筈なのですから。

さらにしばらく経って，娘はあの菫が自然に咲いてきたかどうかと疑い

1　聖マルチンは司教証聖者，その祝日は11月11日。

始めました。そしてキリストに，夫たる別のみ印を下さるようにと願いました。ある時，娘は庭に出てそのことを願い，かつ思いました。「さあ，この隅を捜してみましょう。」彼女がそこを捜すと，婚約の意を込めた指輪が見つかりました。娘は喜び，嵌めてみました。するとそれは彼女の指にまさにぴったりだったのでした。

先の学問師父が，かの指輪を見たなどと申そうとも，それがどのような材質の指輪であったものやら，ただ，純銀の指輪だったとしか判らないのであります。

第六百八十七話　まじめ
精神的に聖体拝領に行き，実際に聖体を拝領すること，など

一人の普通の市民がおりました。職人で，普通の暮らしをし，神を畏れる信心深い男でした。おそらく年にしばしば非常に敬虔な気持を起こして，最も大きい祝祭に聖体拝領に出かけました。ところが，男が女のように何度も聖体拝領に行くというのは，普通にはないことですから，心の中で考えました。「無理にほかの人たちと一緒に聖体拝領に行かなくても，実際，精神的にそうすればいい。」そして祝祭日になると，その必要もないのに，祈り，晩は断食して，ほかならぬ精神的な聖体拝領の準備をしました。そして，ほかの人々が祭壇の所へ行って聖体を拝領するとき，その男はその後ろに跪き，自分も口を開けて，「主よ，わたしの屋根の下にあなたをお入れする資格はわたしにはございません。ただ……」[1] 云々と言い，それを拝領したような気になっていました。長い間そのようにしていると，主なる神は，聖体を拝領する資格はないと思っていたその男の謙虚な態度を見て，手ずから我が身を男に与えようと思いました。それで，男は，いつものやり方で聖体を拝領すると，肉体的にも精神的にも，口の中に聖体の四分の一を，その上強い甘味を感じました。

男は何度もそんな風に感じていましたが，それが本当の聖体なのか，それとも，夢を見るときのように，ただそう思っているだけなのか，疑い始めました。ある時またそれを感じて，指を舌の上へ入れてみると，聖体が

1　新約聖書「マタイによる福音書」第8章第8節。

指にくっついていました。急いで指をまた口に入れようとしましたが，もう甘味も聖体も感じませんでした。神は男から恩寵を取り上げたからです。男は，どんなに後悔し，どんなにその準備をしても，二度と恩寵を受けることはできませんでした。

第六百八十八話　まじめ
星嘘つき師でもある医師のこと

ordinis Minorum（下級聖品）[1] リキオのルペルトゥス[2]は一人の医師のことを書いています。非常に大物の星嘘つき師あるいは星覗き師[3]でした。フィレンツェやジェノアで商人たちの仲間に入り，サフランやその他の香料に，ほかの仲間が投資した外に，自分への割り当てとしておよそ六百ドゥカーテン出して，それを海路他国へ送ろうとしました。すると，医師は，自分が航海を命ずるのでなければ，仲間に陸を離れさせようとしませんでした。黄道十二宮と星位がどうなっている時に出航すれば幸先が良いか，よく分かっていたのです。航海を命じられると，仲間たちは出航し，一，二マイルも行かないうちに，船は嵐にあって沈没し，積み荷もすべて一緒に海の藻屑と消えてしまいました。

この医師は独り者でした。妻にしたい女を探し出しましたが，星の位置が気に入るようになるまで，結婚の約束をしようとはしませんでした。「それと言うのも，」と医師は言いました。「私は星位と十二宮のことを知っている。それを見て結婚式を挙げる人は，夫婦生活で長い平和と大きな喜びを持ち，子宝に恵まれるだろう。」医師は，ちょうど良いと思ったとき，結婚式を挙げました。ところが，半年も経たぬうちから，喧嘩と口論に明け暮れていました。その後間もなく妻は死にました。それからというもの，医師は二度と星を信じようとはしませんでした。

1　下級聖品とは，司教以下，助祭までの教階を上級聖品というのに対し，それ以下の種々の従属的な務めに任ずる職を下級聖品という。

2　Rupertus de Licio.　不詳。

3　Sternenlieger（= Sternenlüger）oder Luger.　語呂洒落。

第六百八十九話　まじめ
マルヒュス[1]，蟻から学ぶこと

神聖な髭老人，聖ヒエロニムス[2]は長老の書の中でマルヒュスという名の修道士のことを書いています。この修道士は，大ぜいの修道士が一緒に神に仕えている団体あるいは集会の中にいました。ある時，修道院長の所に来て言いました。「長老様，団体の中では，一人荒野にいる時のように落ち着いて主なる神に仕えることができないように思われます。」長老はそんな考えを捨てるように言い聞かせ，それは悪魔の誘惑だ，一人でいる方が，団体の中にいるよりも誘惑が多い，と言いました。説得は徒労に終わり，このマルヒュスは思いとどまろうとはしませんでした。院長は許して，修道士は立ち去りました。

さて，修道士は，目的の場所に着く前に，危険な森を通らねばなりませんでした。森には，オーデンの森[3]を行かねばならない時のように，大ぜいの追剝ぎや人殺しがいました。オーデンの森は一人ではなく，いつも何人か集まって通っていました。マルヒュスも，神が自分にどんな罰を下そうとしているのか分かりません。それで，男女六，七人が一緒になって行きました。森へ来ると，みんな捕えられて，町の市場で売りとばされ，マルヒュスは，そして女たちも異教徒の習慣に従って一緒に，一人の金持ちの主人に買い取られました。この金持ちの男は一群の家畜をマルヒュスに任せ，マルヒュスを牧人にしました。マルヒュスは役目を忠実に果し，家畜は大いに殖えました。

主人は，下男のマルヒュスが逃げ出しはしないかと心配して，妻を持たせようとしました。結婚して子供ができ，妻がいれば，それだけ早く居着いてくれるだろう，と考えてのことで，その事について話し合いました。しかし，マルヒュスはそれを断り，妻は欲しくないし，一人で苦労したい，と言いました。主人は脅したり，つらく当たったりするので，マルヒュス

1　Malchus.　不詳。

2　Sant Jheronimus = Sankt (Sophronius Eusebius) Hieronymus (340 [-50] - 419 [20]).　キリスト教の教父，教会博士。

3　Otenwald = Odenwald.　ドイツ南西部の山地。

はそうするよりほかはなくなり，一緒に捕えられた女の一人を妻にしました。そして，夜になって，贅沢なベッドはたくさんないので，自分の小屋で共寝することになったとき，妻に，自分は修道院にいて主なる神に貞潔を誓ったことやその後のいきさつを話し，自分自身を突き刺そうとするかのように，短刀を抜きました。妻は言いました。「そんなことをしてはいけません。私もあなたと一緒に貞潔を守りましょう。」こうして，二人は共に暮らしながら信心を貫き，主人には，二人は一緒に子供を作るだろうなどと，あらぬことを考えさせておきました。

そして，マルヒュスがこうして家畜の番をしていると，蟻が塚の中で暮らしているのが目につきました。一匹が中へ運び込むと，二匹目は手伝い，三匹目は道を教え，四匹目は死んだ仲間を埋めるなど，銘々が何かどうかしています。それを見て，マルヒュスははっと我に返って，考えました。「修道院でもこれと同じだ，誰も怠けてはいない，みんな助け合っている。ああ，なぜ私はずっとあそこにいなかったのか。あそこへ帰れればなあ。」そして，あそこへ帰りたい，と妻に言いました。妻は「それなら私も一緒に行きたい。」と言いました。二人は旅の準備をしました。二頭の豚を刺し殺し，肉は，長持ちするように，その国の習慣にならって，海水の塩で調理し，皮は縫い合わせて，膨らませ，水の上へおろし，肉も一緒にそれに乗せて水に浮かべ，急ぎその場を立ち去りました。

主人は，牧人が妻と共に逃亡したことに気づき，下男を連れて二頭のらくだに乗って出かけ，二人の後を追いました。マルヒュスは主人たちが見えて来ると，言いました。「おい，私たちは殺されるぞ。主人が下男を連れてやって来る。どこへ逃げようか。」あたりを見回すと，一つの穴が目につきました。洞穴で，地中深くまで続いていました。二人は深く奥まで行こうとはしませんでした。マルヒュスは奥にはさそりや獅子がいるかもしれないと恐れたのです。そして，隣にもう一つの穴を見つけ，二人はその中にしゃがみ込みました。主人が追いかけて来て，二人を目の前で見失いましたが，二人が中へもぐり込んだ足跡が見えました。下男はらくだを降り，二人に出て来るように呼びかけて，言いました。「あいつらがじっと黙っているのがよく分かります。」下男は洞穴の中へ入り，奥へ入りすぎました。そこには，雌獅子が子獅子と一緒にいて，下男を殺して，喰ってしまいま

した。主人は「あいつらは二人だ。あいつらが下男を殺したのだ。」と考えて，自分も中へ入って行きました。雌獅子は主人も喰い殺しました。

マルヒュスはとても怖くなりました。すると，雌獅子は子獅子を口にくわえて，連れ去りました。雌獅子は猫の習性を備えています。猫は，子供の置き場所を知られたと気づくと，子供をどこかへを連れ去るのです。マルヒュスは，自分がそこを立ちのくのを雌獅子が許してくれたのを見ると，二人は主なる神に感謝し，二頭のらくだに乗って，数週間後に修道院に帰り，神に仕えました。

第六百九十話　まじめ
灰かぶり女とムキウスのこと

ヨハネス・クリソスティムス[1]の友人であった聖キリルスが書いているところによると，荒野に尼僧院があって，そこにはおよそ四百人の修道女たちがいましたが，とても敬虔で信心深く真面目な者たちでした。その修道女の中の一人が自ら台所の女中になって，賢くない振りをし，火を起こし，薪を運び，洗濯を行い，土鍋を磨き，食卓につくこともなく，自分が土鍋から掻き落とす物の他は何も食べませんでした。こんな風に彼女は灰まみれの仕事を行い，修道女たち皆に仕え，汚れたぼろ布で頭をくるんでいました。夕方，全ての事が片付くと，人目につかぬ場所へ出かけ，神へお祈りをしました。

さて一人の隠者がまた荒野におりました。その人はムキウスという名前で，その徳の高さはあまねく世間に広まっていました。その隠者の所へ天使がやって来て言いました。「ムキウス殿，神は貴方に告げ知らせるために，私を貴方の所へ遣わされました。貴方は，自分が神の領域にまさに到達しようとしていると思っておられます。でも貴方はまだ，あの修道院の灰かぶり女の完璧さには到達しておられません。彼女はこんなふうに布で頭をくるんでいます。（そして彼女の身なりについて語りました。）その人を見に行って下さい。その方は神の立派な身内ですから。」ムキウスは出発し，尼僧院へやって来ました。そして院長に尼僧院の中へ入れてくれるよ

1　Johannes Crisostomus（354頃-407）ギリシァ教会の説教者，聖人。

うにと頼みました。修道女たちは喜びました。というのも，修道女たちはしばしば隠者を迎えに人をやりましたが，隠者は決して来ることを望まなかったからです。ところが今や隠者が自分からやって来たのです。隠者は中へ入って来ると，修道女たち全てを一堂に呼び集めるよう頼みました。修道女たちが皆やって来ました。ところが修道女たちは皆黒い頭巾を被っていましたので，どの修道女にも例の印が見られませんでした。ムキウスは言いました。「院長殿，修道女たちはまだ全部は揃っていませんね。」院長は言いました。「まだ一人外にいます。その修道女は我々の所へは参りません。あの女は賢くないのです。下女の仕事をしているのです。」ムキウスは言いました。「その者を力ずくで中へ連れて来て下さい。」

二人の修道女が外へ出て行き，彼女の腕を抱えて中へ連れて来ました。ムキウスは，そこに天使が自分に告げた印を見ました。そこで彼女を迎えに出て，その前にひざまづき，私に祝福を与えて下さい，と頼みました。彼女はムキウスの前にひれ伏して言いました。「隠者様，貴方は司祭です。貴方の方こそ私を祝福して下さい。」そこでムキウスは，神が天使を通して自分に伝えられた次第を修道女たちに告げました。すると修道女たちが次々にやって来て，彼女に対する自分たちの罪を告白しました。ある者は彼女に水を振りかけました，またある者は彼女を嘲笑しました，云々。彼女はそうしたことには辛抱強く耐えましたが，その後に人々が彼女に与える栄誉には耐えられませんでした。そこで彼女は秘かに尼僧院から荒野へと抜け出しました。こうして彼女が何処へ行ったか誰も聞き知る者はなかったのです。

第六百九十一話　冗談
十四の大罪，二十の戒律

学識があるという評判の司祭がいました。でもとても愚直な男で，教区を管理する能力がない，と司教へ訴えられました。司教はその司祭を呼び出しました。さて司祭がやって来ると，司教は司祭に尋ねて言いました。Quot sunt peccata mortalia.（死に値する大罪はどれほどあるか。）「永遠の死を課せられるような罪悪は，幾つあるか。」司祭はそれが分かりません。司教の後にいた副司教が七本の指を出しました。司祭はそれが理解出

来なかったのですが，七本の指であることはよく見えました。副司教は，もう一度七本の指を出しました。そこで司祭は言いました。「十四です。」司教は，神の戒律はいかほどあるか，と司祭に尋ねました。司祭はそれも分かりません。副司教はそれが十の戒律であるというつもりで，十本の指を出しました。司祭はそれが理解出来ませんでした。そこで副司教は，もう一度十本の指を出しました。すると司祭は言いました。「二十です。」そこで司教は，その学識のない司祭を罷免しました。そうすべき時でした。

第六百九十二話　まじめ
彫像が男の方へ首を傾けたこと

ある時ある男が，賭事の場で人を刺し殺しました。亡くなった男には弟があり，弟は兄の復讐をしようと長い間相手を追い求め，相手を刺し殺してやろうと思いました。さてキリスト受難の日，たまたま兄を殺した男が武器を持たないで，フィレンツェの町へ行こうとしていました。他の市民と一緒にいた弟が，かたきの男と出会いました。弟はかたきの男を見るや刀を抜き，男を刺し殺そうとしました。するとかたきの男は地面にひれ伏し，慈悲を願って，赦して下さい，「今日はキリストを偲ぶキリスト受難の日ですから」と頼みました。弟は言いました。「私は神のために貴方を赦し，貴方を私の友として受け入れよう。」こうしてかたきの男を地面から助け起こし，その腕を抱えて，共にそこから遠くない聖アメニアトゥス教会へ行きました。弟が教会の中へ入って行くと，柱にかかっている磔刑像が彼の方へ首を傾けました。そして今なおそのままの姿なのです。そのことを説教師である私は自分の眼で見ました。

どんな人も赦すようにすべきです。旧約聖書の祖先たちは実際またそのようにしてきたのです。ヨセフは自分を売った兄弟を赦し[1]，ダビテはシムイ[2]とサウル[3]を赦しました。そして新約聖書の聖者たち，聖ペテロ，聖パウロ，聖アンデレ等もまた同様です。

1　創世記第45章
2　サムエル記下第19章
3　サムエル記上第24章

第六百九十三話　まじめ
婦人が人殺しの手にキスをしたこと

ある町で，テアティナという名前の男が刺し殺されました。殺された男は市民である一人の妹を後に残していきました。妹は男たちを雇って，兄を殺した男を刺し殺してくれるようにと，男たちに多くの金を与えました。一人の聖職者が四旬節の説教をするために，そこへやって来ました。その人の名はヨハネス・カピストラヌスと言い，彼の諭しによって彼女は，かたきの男を赦そうという気持ちになりました。彼女は兄を殺した男の所へ行き，男の手を取り，こんなふうに言いました。「これは私の愛する兄を刺し殺した手です。しかし私の代わりに十字架にかけられた神の御手に免じて，私はそれを赦します。」こう言って手にキスをしました。するととても甘い香りが彼女の手から立ちのぼり，その場に居あわせた全ての人たちが，その喜びを受け取りました，云々。

シュトラースブルクにて
ヨハネス・グリーニンガーにより印刷され，
われらが主キリスト降誕後の千五百二十二年の
聖母生誕日に完成さる。